

日本
加ルタリ
文学大系

8

蔵原惟人
野間宏 竹内好

日本加文学大系

8

転向と抵抗の時代
中日戦争から敗戦まで

三一書房

日本プロレタリア文学大系 8 定価二二〇〇円

一九五五年二月二十八日 第一版発行
一九六九年八月十五日 第二刷発行

編者代表 野間 宏

発行者 竹村 一

発行所 株式会社 三一書房

東京都千代田区神田駿河台二の九
電話東京(二九一)三二三一〜五
振替東京 八四一六〇番

郵便番号 一〇一

印刷 文栄印刷株式会社
製本 有限会社 佐伯製本所

落丁・乱丁本はおとりかえします

第八卷 「転向と抵抗の時代」

凡 例

一、収載作品はできるだけかぎり初出の新聞 雑誌によつて校合した。
ただし仮名づかいはすべて新カナに改め、伏字はおおむねものと
のままとした。

二、収載作品の配列は、小説・戯曲、評論、詩・詩論、短歌、俳句
の各文学ジャンル別にしたがった。無署名のアップールなどは
資料として評論の部に編入した。

三、各ジャンル内の収載作品は、原則として発表年月順によつた
が、ときに執筆年月によつて配列した場合もある。

四、短歌・俳句の作品選定は、各巻をとおして、渡辺順三、栗林一
石路の両氏に協力をあおいだ。

第八卷 目次

I 小説

梟	伊藤永之介……………
光の中に……………	金史良……………
樹々新緑……………	佐多稻子……………
廊下……………	壺井栄……………
三月の第四日曜……………	宮本百合子……………
街あるき……………	中野重治……………
櫻の芽立……………	橋本英吉……………
子を護る……………	葉山嘉樹……………
煉瓦女工……………	小池富美子……………
日本の活字……………	徳永直……………
坂……………	小沢清……………
ヒットラー(戯曲)……………	中野秀人……………

II 評論

散文精神について……………	広津和郎……………二五五
考える世代……………	岩上順一……………二五六
文化政策への期待……………	窪川鶴次郎……………二六四
ホワイト・リスト論……………	中島健蔵……………二七一
「二葉亭的と鷗外的と」……………	除村吉太郎……………二七四
「暗夜行路」雑談……………	中野重治……………二七九
コッペルニクスの転向……………	花田清輝……………二八四
文学と時代……………	佐々木基一……………二九〇
間隙の克服……………	小田切秀雄……………二九七
荒木寅三郎の頭……………	河上肇……………三〇六

III 詩・短歌・俳句

詩

蝶 他……………	壺井繁治……………二七
夢の戦場 他……………	岡本潤……………二九
女のすすり泣きの歌 他……………	小熊秀雄……………三〇一
Impromptu 他……………	中野重治……………三〇八
落 下 傘 他……………	金子光晴……………三一三
白 い 炎 他……………	小野十三郎……………三二〇

七月二日	赤木健介	三六二
幼年他	金鐘漢	三六三
ざれ歌他	ひろし・ぬやま	三六四
味噌	河上肇	三六五

*

附 戦歿詩人集 (「はるかなる山河に」「きけわだつみのこえ」その他)

泥濘他	田辺利宏	三六六
面会他	浅見有一	三六八
私は便所の中でこれを書いている	武井修	三六九
馬	大関松三郎	三七二
道祖神祭	来海宏	三七三
愛情	稲垣光夫	三七三
さようなら	杉村裕	三七三
初雪	樋詰辰夫	三七四
巖	中村喜代司	三七四
暁の光を待つ	保立靖子	三七五
黄なる土	川崎誠	三七六
肌近い死	小倉竜男	三七七

短歌

上 海……………三七八

硝煙のなかに……………三七八

冬 草……………三七九

新らしき糧……………三七九

一 条 徹……………三七九

青 江 竜 樹……………三八〇

高 橋 政 治……………三八〇

山 埜 草 平……………三八一

渡 辺 順 三……………三八二

小 名 木 綱 夫……………三八三

内 田 穰 吉……………三八六

橋 本 夢 道……………三八七

栗 林 一 石 路……………三八八

神 代 藤 平……………三八九

三 浦 成 一 郎……………三九〇

横 山 林 二……………三九〇

すずき・ゆきひと……………三九一

林 冬 二……………三九二

斎 藤 則……………三九三

今年の冬はきびしい 他……………

むしろの上 他……………

調 べ 他……………

俳 句……………

山口 羊仙……	三九二
藤 田 港……	三九三
清 内 路 二……	三九三
三池桑拓木……	三九三
市 木 千 尋……	三九三
嶺 達 二……	三九三
井 形 春 一……	三九三
多 胡 比 左 志……	三九四
住 吉 珍 什 郎……	三九四
北 原 良 子……	三九四
柳 京 次……	三九四
斎 藤 繼 子……	三九四
奥 田 平……	三九四
石 橋 辰 之 助……	三九四
東 京 ……	三九五
藤 田 初 己……	三九五
碓 郎 幹 介……	三九六
加 藤 楸 邨……	三九六
中 村 草 田 男……	三九七

年解

表 説

中日戦争の開始から敗戦まで
 (一九三七・七一・一九四五・八)

日本近代文学研究所編

一九

古家 樞夫……………三九
 中台 春嶺……………三九
 石田 波郷……………四〇
 江原 恒雄……………四〇
 小柳 昌……………四〇
 杉村 聖林子……………四〇
 岩崎 健二郎……………四〇
 戸田 茂……………四〇
 竹内 好……………四三

I
小
説

梟

伊藤永之介

その朝真つ先に酒役人の姿を見つけたのは、川向うの小高い草刈場にいた茂助であった。村は出羽山脈の西へ傾く余波が平野に尽きようとする尾根の間に抱きこまれていたが、その間を遙か彼方に流れ下っている川の流域は平坦な田圃が続き、殆んど眼をさえぎるものがなかった。したがって仮令酒役人が検挙に来て、その姿が一里も先からわかってしまふ、その間にすっかり犯跡をくらましてしまふので、ここだけは酒役人も手を焼いていた。部落のものは洋服姿とさえ見れば酒役人ときめてしまうほど誰でも神経をたてていたが、そのとき、はるか川沿の街道を自転車の一隊がやって来るのに、茂助はふと気がついてぎょっとして眼をすえると、それはまぎれもない酒役人であった。茂助は一目散に草刈場をかけ降り、鬼こ来たあ、鬼こ来たあと呼びながら、畔路づたいに川向うの部落の方に走っていた。間近に田圃を控えて土ならしに田圃へ出ていた男た

ちは腰をのばして、鬼こ来たって、本当か、と銅鑼聲をはりあげて聞き返したが、茂助が走りながら指す方をふり返ると、たちまち土ならしを投げ出したまま走り出した。それを見ると野良に出ていたものはいっせいに蛙のようにびよんぴよんと道路に跳ね出し、われ先きにとわが家の方に走った。

近年はとくに濁酒密造の検挙が手きびしくなり、毎年五軒も六軒も検挙される部落などもあつてその度に五十円、六十円という筈棒な罰金をかけられては、どんなに上作をとつたつて追いつかないというので、みんな用心深くなり置き方もうまくなつて、濁酒麴は決して家のなかに置かない。置いても土間に穴を掘って埋めた上をわからないように丁寧にならして置くとか、便所のなかにしのばせて置くとかする。更に用心ぶかいものは山のなかに埋めて枯葉や柴をかけたり、木のほら穴にかくしたり、川原の藪のなかにひそめたり、お堂の床下に置いたりするので、たとえ役人が発見しても、犯人をつかまえることは六つかしかった。そうして置いて日暮がたに当座の分だけ山へ掘み出しにゆくので、冬ならば足跡をたどれば検挙出来ないことはなかったが、丈余の雪を冒しての冬季の検挙は酒役人の手に合わない難儀な仕事であつた。しかし、ここはそういう地理的關係から、検挙が六つかしいというので、酒役人も匙を投げた形であつたところから、自然用心をおこたうがちで、戸外に持ち出して造っているものもすくなくかつ

ただけに、いざとなるとそのあわて方は格別であった。

子供たちは鬼こ来たあと叫びながら面白半分にならぬ中を煎り豆のようにかけ廻るし、女房たちは裏口から飛び出してそつと隣触れに順々に触れ廻わした、鉢をふり上げ畑を掘り返して甕を埋めにかかっているもの、お堂のなにかくして走り去るものもあれば、大きな甕を抱いて川原の方に駆け出してゆくものもあった。二人がかりで桶をさげて山へかけ出した夫婦が、よちよち歩き出したばかりの子供がしつこくあとをついて来るのに気がついて、家さ行け、家さ、と女房は叫び、犬を追うような手つきで追いたてたが、それでも帰ろうとしないので、しまいにその子供を背負って行った。かけつけるのが遅れて急場の間に合わないを見た亭主は、勿体ないな、罰あたって眼玉つぶれるべと言いながら、甕のどぶろくを流れに棄てた。それさえ間に合わないと見てとつたものは、あわてて外へ飛び出したり、また家へかけこんで見たり、そこいらをただうろつき廻わつた揚句に、すっかり戸締りをしてどこかへ逃げ出してしまった。

こんなとき、子供は手足まといにもなったが、便利なこともあった。子供等は見晴しのきくところまで夢中でかけ出していつて、やれ橋のところまで来たとか、役場に寄つたとか、どこそここの部落に入ったとか、誰その家に踏みこんだとか、酒役人の動きをいちいち我が家に報せにかけ戻り、親戚や隣近所にも触れ廻わつた。酒甕をかくしただ

けで済めばなんでもなかったが、酒糟の残りを見つたり匂いをかぎついたりすると、それだけで密造しているものとしてしつこく追求する酒役人に対して、平気で突っばるだけの勇氣がなかったもので、どの家でも女房や娘や婆さんたちは血眼になって、口鍋とか土瓶とか徳利とか盃とか、一切合材の酒の匂いのするものを洗ったり拭いたりすることでごった返していた。女房たちは、今偵察して戻つて来たばかりの息子に、お前もう一走りしてどこまで来たか見て来いとか叫びながら、用器はすっかり洗ってしまったのにまだ安心出来ないらしく、今度は濁り酒の甕でもこぼれていないかというので、戸棚や板の間を顔を充血させて嗅ぎ廻わつた。

役人の自転車がすべりこんで来るとさすがに部落は、ひとつりとしずまり返つた。子供たちはまだ走り廻わつていたが、大人はそつと戸のかげから役人たちの方をぞいてすぐに顔をひっこめた。杖のように瘦せたのっぽの男が上役らしく、もう一人は役人にしては珍らしくがっちりした体つきの若い男であった。震えたりすれば却つてあやしまれると言われていたが、もし自分の家に踏みこまれたらという心配で膝頭は自然にふるえて来た。二人の役人は路ばたに自転車をとめて何事かしめし合わせていたが、間もなくお婆さんのところへ飛びこんだ。

夫婦は遠方の田へ出ていたので婆さん一人だった。息子の専之助は酒好きの方でなかったたので、婆さんのところで

は濁り酒をつくっていないことは誰でも知っていた。そこで婆さんは別段あわてるところなくありのままを答えただけで、一向取り合おうとしないので、年寄の図々しさで、白っぽくれていると思ひこんだ役人は、一層腹を立てて土足のまま上りこんでさがしはじめた。上夜の役人は如何にも事務的に、先ず戸棚をあけてその長い首をすっかり突っこんだり仏壇をゆすって見たり、流しものと匂いを嗅いで見たり、板の間をすかして見たりしていたが、若い方はたけり立った鬨犬のような勢いで、どこかかと納戸におどりこんで万年床を蹴つとばし、やがて床下にもぐりこんで這い出して来たかと思うと、今度は便所へ廻わって見たり馬の糞を棒で掻き廻わしたりしていたが、終いに土間に伏せてある白をひっくり返して見た。それは一度そのなかから思いがけなく酒甕を発見したことがある経験にもとづくものであった。

上役はがっかりして婆さんのところに戻って来たが、見ろ、この通りぶんぶん酒の匂いするじゃないか、今のうちに白状すれば罰金負けてやるが、強情つばれば高くなるぞ、といったものきまり文句をきまりきった調子で言い出した。酒造らなくとも、匂いはするもんだすかなと婆さんは腹立ちまぎれに皮肉った。若い役人はそれを聞くと、ますますいきり立って詰め寄りながら、この野郎役人を何だと思ふ、ただ置かねえぞと怒鳴りつけ、上役のところへひき返して何やら打ち合わせながら紙片に万年筆を走らせてい

たが、やがてその紙片に判を押すことを求めた。旦那さんそりゃあんまりだすべ、悪いことしねえもの、何んで判など押すって婆さんは畳に両手をついて尻込みするのになんでもいいからお前は黙って判を押せばいいと役人はたたみかけた。すると婆さんは事の重大さに気も転倒せんばかりになって、判押すごったば、忤さ相談しねばならねえから、何んとか、帰ってくるまで待つて下されと言った。それじゃなあ、判でなくてもいい、指判でいいからなと上役が言くと、若い役人は腕をのばして婆さんの手を取った。旦那さんなんということするすと婆さんは身をもがいたが、もう婆さんの皺だらけの指先は朱にそまっていた。

ちょうどそのころ役人の他の一隊は、六兵衛ところに飛込んで引き上げるところであつた。どぶろくをつくっているものが、千刈百姓にかぎっていないに、土蔵の一つもある家々には滅多に飛び込むことがない酒役人が、まっすぐ六兵衛の家をめざしたのには、憎まれものの六兵衛のこと故密告者があるに違ひなかつた。酒役人を見て六兵衛は一寸驚ろいたがすぐ相手が学校を出て間もない若い役人と見てとると、おや、町から何用で御座つたす、さあ先ず先ずと高飛車に出ながら、万一の用心にどぶろくの一升瓶が這入っている戸棚を背にして炉傍に胡坐をかき、ゆっくりと煙管を吸いつけ、どぶろくの検査に來たと言う役人に向つて、どぶろくの検査って、密造のことですか、俺もう何十年來どぶろく見たことも無いども、今でも貧乏百姓は、つ

くつてゐるすかなあと云つてから、先刻のみこんだ煙をやつとそのときになつてふうと吐きだした。這入つて来るときからその裕福らしい家構えに気がひけていた役人は、もじもじしながら、いやこのごろは大分減つたようですが、一応検査する必要があるもんでと言い、傍らの役人に退散の眼くばせをした。

その様子でもうすっかり安心した六兵衛は、家さがしされたとなれば世間体はよくないども、調べるならなんぼでも調べなされ、少し家の中が広いから手間がかかつて大変だべども、と言つた。すると役人はそれっきりで、いやもう急ぎますから、失礼しましたと、こそこそと戸外に飛び出していった。

そのとき、すぐ向うを酒麴を抱いて雑木山の方に走つて行く女の姿が眼についた。追いかける、と一人が叫ぶなり、自転車ですてて走り出したが、必死に逃げのびようとする女の足はなかなか馬鹿に出来なかつた。わけなくふんづかまえられると多寡をくくつていたのが、意外に手間がかかるのに役人はすっかり向つ腹を立てて、躍起になつて山にかけ上つていった。地理にくわしい女は、杉林のかげに姿を消したかと思うと、忽ちひょっこり反対側にぬけ出して、がさがさと首をさせて野犬のように素早く熊笹をわけて、今度は部落の向う側の楢林に姿を消した。

一人の役人は間もなく楢林から駈け出して転がるように傾斜を走り去つた女が、さつき抱きかかえていた酒麴を抱

いていないのを認めることが出来た。役人はほくそ笑みながら、ゆっくり今女が出ていったばかりの楢の茂みのなかに這入つていった。若い方の役人が笹の葉のかげから獲物を拾い上げようとして屈んだ瞬間、あつと叫んで顔色を変えた。思わず窪地からぼんと跳上つて上役に指したのは、ぼろ布に包まれた梅干のように皺寄つた顔の死児であつた。役人は暫らく何か話し合つていたが、すぐ眼の下の方で一人せつせとはたらいっている男には別段気にもとめずに間もなく引き返していった。

そこは部落とは反対側の山かげになつていたので与吉は酒役人の襲来をそのときまで知らずにいたが、お峰のあわてた様子を背のびして見ると、間もなくあらわれたのが、まぎれもない酒役人であつたので、役人がそのままにしていたものを見にのこのこと這い上つていった。亭主の新治郎はお峰が三人目の子を生み落すのも待たずにあの世に行つてしまつたが、間もなく生れた子も二十日足らずで死んだことは与吉もうすうす知つていた。亭主のときでさえ仏のためにお経一つ読んでももらえなかつたお峰は、重なる不幸に医者も呼べないところから、死んだ子の始末に困じ果ててボロに包んで縁の下にかくして置いた。そこへ酒役人が来たのでお峰はあわて出したのであつた。与吉は流石にぎよつとして、しばらくぼんやりしていたが、しかし間もなく巡査や酒役人にひっぱられてやつて来るに違いないお峰の首垂れた姿が眼に浮んで来るとともに、与吉の鬼を